

臨床研修とカルトの手法

2005年3月10日

目次

1	臨床研修とカルトはよく似ている	2
1.1	カルトの定義	2
1.2	反社会的でないカルトもある	2
1.3	カルトの方法論=マインドコントロール	2
1.4	”教育”とマインドコントロールは同じもの	3
2	私たちはマインドコントロールをうけている	4
2.1	マインドコントロールには下準備が必要	4
2.2	研修医はマインドコントロールを受けたがっている	5
2.3	卒後研修はマインドコントロールの手法を使う	5
2.4	マインドコントロール手法の長所と短所	7
3	マインドコントロール的な臨床教育の弊害	8
3.1	他の病院の医師と上手くいかない	8
3.2	情報はしばしば間違って伝えられる	8
3.3	間違っただけが判断ミスを生む	9
4	マインドコントロールを解く方法	10
4.1	”ディプログラミング”の手法は危険	10
4.2	勉強することでマインドコントロールを解く	10
5	それでもマインドコントロールは必要	12

1 臨床研修とカルトはよく似ている

1.1 カルトの定義

新興宗教組織、人格改造セミナーのようなカルト団体は日本にもいくつかありますが、どれもが特徴としているのは以下のようなことです。

- 信者の人格のコントロール
- 信者と信者の家族との関係の破壊
- 信者と社会との関係の破壊

カルトの目的はさまざまです。社会に対して破壊活動を行う「破壊的カルト」と呼ばれるものから、単なる同好会的な組織まで、カルトはその規模、目的ともいろいろあります。

1.2 反社会的でないカルトもある

その組織の目標が、社会の役に立つようなものであっても、カルト的な組織はいくらでもあります。カルトの定義はさまざまですが、フランスなどではYMCAも”カルト”と定義されているそうです。

カルトの定義は反社会的であるかどうかではなく、信者一人一人と、社会とのかかわりが保たれているかどうかで決まります。

日本の山伏の修行や密教の荒行などは、日本人から見れば”信心深い人”にしか過ぎませんが、日本の宗教事情を知らない海外の人から見れば、それらは”マインドコントロールされたカルトの犠牲者”と写ってしまうかもしれません。

1.3 カルトの方法論=マインドコントロール

カルトに深く取り込まれた信者は、本人は強制されているという自覚無しに信じられないことをします。

日本でも”カルト”と定義されている宗教団体はいくつかありますが、彼ら一般信者の生活は、我々から見れば悲惨です。

インターネットもプレイステーションもない生活^{*1}は、今ではちょっと信じられません。

^{*1} この比較対照も、悲惨な生活かもしれませんが...

一方でカルトの内部の人から見れば、我々の方が”真理を知らない、かわいそうな人々”に写っています。

普通の人が入る カルトに取り込まれた人は、少し前までは普通の生活をしてきた人がほとんどです。何の不自由もなく学生生活を送ってきた大学生が、驚くほど短期間で、カルト団体の厳しい生活に取り込まれていきます。マインドコントロールを受けてしまっている人にそれを指摘すると、「あなたこそ、世の中にマインドコントロールされていて、真実が見えていない。」などと反論されます。

カルトは、非常に巧妙な方法で信者の価値観を作り変えていきます。この方法をマインドコントロールといいます。こうした方法は、カルトならではのオカルト的なものとは無縁の、現代心理学に裏打ちされたものです。

マインドコントロールはオカルトではない マインドコントロールの方法論は朝鮮戦争前後から作り出され、今もその方法論は改良されています。”他人を意のままに操る”ことはオカルトめいた話でもなんでもなく、適切な症例を選び、正しい方法で行えば、誰でも同じことが出来るぐらいに体系化されています。

♣ どういう状況で、どういう教えかたをしたら、人間の価値観をどう変化できるか♣、こうしたことはかなり解明されています。

方法論は今も改良されている マインドコントロールには、かかりやすい人と、まったく効果がない人とがいます。このため、いまだにその存在を信じない人がいます。

マインドコントロールの方法論は、今も改良が続いています。ちょっと冷やかに、こうした団体をのぞきに行って、そのまま帰ってこなかった人は今までにも何人もいます。

1.4 ”教育”とマインドコントロールは同じもの

学校教育と、マインドコントロールとは違ったものであると定義されています。

教育とマインドコントロールとの違いは、以下のように説明されています。

- 教育は、行動のコントロールをしません。もちろん”授業中は静かにする”程度のことには行いますが、カルトほど極端ではありません。
- 教育は、個人の思想にまで言及しません。マインドコントロールでは、その組織の教えに疑問を持つことを禁じていますが、教育現場では疑問を持つ子供を歓迎します。

- 教育は、感情のコントロールをしません。カルトでは、不安や恐怖を使って思想を教え込みます。普通の教師は、生徒の不安や恐怖心をかき立てて授業に集中することを強要するようなまねはしません。
- 教育は情報のコントロールをしません。カルトはしばしば外部の情報源を遮断しますが、教育現場ではそういった制限をしません。

本当にそうでしょうか。

一般の教育も、子供に何かを教え込もうとしています。特に、第二次世界大戦中の教育などは、国をあげてのマインドコントロールだったという人もいます。なぜ勉強しなくてはいけないのか、なぜ人を殺してはいけないのかといった問題の答えを、小学生にも分かりやすく語れる教育者はいません。”ちゃんと勉強しないと、いい大人になれませんよ”などという使い古された言葉は、生徒に恐怖をもたらしてはいないでしょうか。

両者には何のの違いもない マインドコントロールとは、信者の個性を奪い、カルトの目的にそった集団行動を強制する技術です。しかし、”教育”と称するものも、社会という得体の知れないものに適応し、貢献させるためのマインドコントロールに他なりません。

程度の差こそあれ、”教育”とマインドコントロールとは同じ延長線上にあります。違うのは、マインドコントロールのほうが方法論が確立されており、”有効である”という点だけです。

2 私たちはマインドコントロールをうけている

2.1 マインドコントロールには下準備が必要

同意のない人のマインドコントロールは大変 一般市民をいきなり拉致しても、その人にマインドコントロールを施すのは大変です。

こうした状況の代表が朝鮮戦争当時に行われた”洗脳”ですが、このときは捕虜の反抗心を減らすのに、拷問や飢餓、眠らせないといった方法を用い、反抗心を奪いました。それでも、洗脳が完成するには何年もかかったといえます。

洗脳とマインドコントロールとは別物 現在のカルト団体は、もっとスマートな方法を用います。自己啓発セミナーは、洗練されたカルトのようなものですが、ターゲットをソフトに勧誘、あるいは自発的にセミナーに参加してもらった後は、

1. ターゲットが今まで経験したことがないことを体験させ、日常の価値観を揺さぶる

2. ターゲットいかに無力で価値のない人間であったかを、”討論”や”グループワーク”といった方法で自覚させる
3. 軽い”修行”でターゲットも組織の役に立つことを示し、カタルシスを与え褒め称える
4. ”修行”を積んだ人間による奇跡を見せ、自分も将来こうなれることを納得させる

といったことを3日程度のコースで紹介します。

個人差はありますが、上記のようなコースを経験した人は、今までの価値観が壊され、カルトの望むような思想を受け入れやすい状態になります。

この部分は、マインドコントロールの入り口にあたる部分でもあり、各カルト団体がもっとも力を入れている部分でもあります。

この後、カルトはこうした人を世間から隔離し、本格的なマインドコントロールに入ります。

2.2 研修医はマインドコントロールを受けたがっている

医学部を卒業したばかりの医学生は、こうした下準備を自分で行ってしまっています。

1. 卒業間際、自分の意思でよく考え、研修病院や大学医局への入局を決定する
2. 病院は、大勢のパラメディカルから”先生”と呼ばれ、自分の世界がまったく違ったものになったことを体験する
3. 病棟デビュー直後、まったく患者の役に立たない自分にショックを受ける
4. 患者が亡くなったり、心肺蘇生に参加させてもらえたりする体験は強く感情を揺さぶられる
5. 1年上の上級生が末梢点滴を簡単に入れるのも、新入生から見れば立派な”奇跡体験”である

こうした過程を通じて、医学部を卒業した研修医は、自分からマインドコントロールを受け入れやすい精神状態を作ってしまう。

2.3 卒後研修はマインドコントロールの手法を使う

マインドコントロールは、以下のような原理を利用しています。

- まったく新しい環境に置かれると、自分の経験よりも、自分が信用できる他の人間

が経験したことを優先して信じるようになります。

- 環境が変わった瞬間は、人間はあらゆる考えを無批判に受け入れます。

そのうち、新しい世界の知識が積み重なっていくと、すでに信じているものと、新たに学んだこととの間に衝突が生じるようになります。この時点ではじめて、人間は他人の言うことに対して、懐疑的に考えるようになりますが、カルトは教義に対する批判がなくなるよう、巧妙に教育内容を調整します。

- カルトの教義は、その世界の中では矛盾がありません。リーダーに質問をしても、すぐに答えが返ってきます。
- カルトのリーダーに答えられないような質問、過去に別の信者が教義を疑うきっかけになった質問は”タブー”とされ、それを聞くことは罰せられます。
- 教育する際は、意識して断定的な表現が使われます。これには反対意見もある、といった情報は制限されます。
- リーダーと信者の力関係は、常にリーダー優位に調整されます。
- 不眠や恐怖、といったカルトの古典的な手法は、リーダーを批判する気力を減らします。
- 一般的に、人は中間を認められないと、意志決定を他人に委ねるしかなくなってしまいう傾向があります。権威を持った人に、「君は米軍基地反対だろ?それを認める政府与党も許せんよな?だから一緒に政府を打倒しよう!」などとたたみ込まれると、なかなか NO とはいえないものです。

医師の研修システムと、カルトのマインドコントロールの手法は、よく似ています。

- カルトは、信者以外の人間を敵視、軽視させます。
研修病院に入った研修医も、他の病院に入った研修医に対抗意識を持つよう、教育される傾向があります。
- カルトは、教団組織への絶対服従を強制します。
卒業したての研修医がチームに参加しなかったら、医療は成り立ちません。
- カルトは、教義に対しての批判的思考を否定します。
卒業したばかりの研修医から”批判的意見”など出されても、上級生はいちいち理由を説明している余裕はありません。
- カルトは、これまでの人間関係や人生など、過去との断絶をさせます。
研修医が白衣を着た時点で、学生生活は終了し、医師としての新しい生活の始まり

です。

- カルトは、信者の個性や自主性、プライバシーを否定します。
これも、卒業後すぐの研修医には与えられないものです。
- カルトの世界観は、善と悪、光と闇のように二元論的です。
知識の十分でない上級生による教育は、しばしば”こうすることが正しい”と断定的になります。実際には反対意見もあったり、中間的な立場をとる論文は必ずあるものですが、経験の十分でない上級生はそこまでは教えられません。

こうした傾向は、多かれ少なかれ、すべての科の臨床研修で認められるはずで

す。どちらかという、”厳しい研修””良い医師を育てる”と宣伝している大手病院ほど、こうした傾向が強くなります。

大体、”良い医師””患者のための医療”などという具体性のない、どうすれば実現できるのか分からない目標は、カルトの教義そのものです。

2.4 マインドコントロール手法の長所と短所

厳しい研修医生活も”地上の楽園”に見えてくる マインドコントロールの手法を用いた臨床研修は、効果的です。

こうした方法が効果的に作用した研修医は、朝早くから夜遅くまで、嬉々として働きます。寝るひまもない生活は、”他の病院のやつらとは違う”というプライドの源にもなり、”今日は5本の末梢点滴が入った”といったことに生活の喜びを見出すようになります。

スタッフの言葉は、神の言葉に等しいものです。まじめな研修医は、スタッフの何気ない一言をもメモ帳に書き留め、自分のものにしようと努力するようになります。

もちろん、上級生に逆らうことなど、論外です。逆らわずに”家族”としてチームの一員に迎えられることは、研修医にとって喜ばしいことです。

こうした状況では、臨床医として必要な知識は、非常に効果的に頭に入ります。卒業したての研修医は何の役にも立ちませんが、こうした環境に身をおくことで、研修医は急速に”役に立つ知識”を身につけていきます。

問題点は当然多い 一方で、こうした方法には、当然問題もあります。マインドコントロールの手法が入ると、教え込まれた知識を状況に応じて変化させることができません。知識の応用がきかなくなります。

また、教えられた知識が間違っただけであった場合、後にそれを訂正するのが大変で

す。別の人に知識の間違いを指摘された場合、マインドコントロール的な教育を受けている人は、自分の間違いを訂正しません。むしろ、自分の間違った知識を何とか合理化しようとし、相手のほうが間違っていると思い込もうとします。

3 マインドコントロール的な臨床教育の弊害

マインドコントロールの手法で教育を受けた研修医は優秀です。同世代のほかの研修医に比べて、手技的にも上手く、知識も豊富に持っています。救急の場数も踏んでいることが多く、急変の対応もすばやく行えるようになります。

ならば、こうした研修医が研修期間を終えた後、各地の病院で優秀な臨床医になっているのでしょうか。

必ずしもそうはならないように思います。

3.1 他の病院の医師と上手くいかない

こうした教育を受けた医師は、自分の研修を受けた病院に対して強いプライドを持っています。こうした医師が新しい病院に赴任しても、自分のもといた病院の方法論を通そうとします。

新しい病院の上司が、彼の方法を訂正しようすると、衝突が生じます。

このとき、反論の理由は医学的に適切かどうかは問題にはなりません。”あなたより、自分のもといた〇〇病院の先生のほうが優秀だった”というのが論拠になり、指摘を受けた内容が医学的に適切かどうかは、その医師の頭には関係ないことがあります。

3.2 情報はしばしば間違っただけで伝えられる

マインドコントロール的な手法を用いる病院では、医学教育を通じて与えられる情報は、一種の”教義”です。

教義に対する批判は許されず、先輩からの医学知識はしばしば間違っただけで伝わります。

例えば、喘息重積発作の患者に気管支拡張剤の吸入のみを行い、効果が得られず亡くなってしまった、という症例が過去にあったとします。

伝えなくてはならないのは、”喘息患者は急変するから、吸入だけで放っておいてはいけない”という部分ですが、数世代後には、これが”救急車できた喘息患者は、

吸入禁忌”に変形していたりします。

もちろん、先輩からの言い伝えが即トラブルになるようなら、それが間違っているとすぐにわかります。ゆがんで伝わった知識のとおりに行動していても、例外的なケース以外では、それで上手くいってしまいます。

しかし、とりあえず上手くいく方法と、今の医学レベルで最適な方法とは、しばしば異なります。それでも、上司に対する批判が許されない世界では、こういったゆがんだ知識が”エビデンス”としてまかり通っていたりします。

3.3 間違った条件づけが判断ミスを生む

自分の力だけではエラー訂正は出来ない 研修医が成長して、こうした知識の真偽を自分で検証すれば、トラブルは起こりません。しかし、ゆがんだ知識であっても、それで何とかなっていた場合、勉強する研修医は”自分の経験を補強してくれるエビデンス”を探すことはしても、”何が一番正解に近いのか”を探すことはできません。

結果、”勉強”という行為も、自分にゆがんだ形で伝えられた条件づけを補強する効果はあっても、もっと正解に近い知識に、自分の頭を訂正する効果はないことがあります。

それでも、ほとんどの場合は、それが大きなトラブルになることはありません。少なくとも、その病院では、先輩たちからの言い伝えを守って死者続出、といった事態にはなっていないのですから。

マインドコントロール中のエラーが医療ミスを生む しかし、こうした間違った形で伝えられた条件づけは、何かのはずみでトラブルの原因になります。

前の喘息の話で行くなら、喘息患者が吸入を望んでいるのに、”そんなことをしたら死んでしまいますよ”と患者を叱ってしまったり、気管支拡張剤の投入タイミングが送れて気管内挿管になってしまった、といったケースがそれです。

この喘息の例は筆者のものですが、自分の頭の中には”マインドコントロール爆弾”とでも表現すべきものは、まだいくつかあると考えています。こうしたものは、実際問題にならなれないとなかなか訂正できません。

研修期間が空けてから何年かの間に、自分の脳の中に残った、こうした間違った思い込みはいくらか減ったとは思いますが、しかし、まだまだ何が起こるか分からないというのが正直なところです。

4 マインドコントロールを解く方法

研修医時代に身につけた知識は、ちょうどパソコンのプログラムのようなもので、必ず何らかの”バグ”があります。

本来は、こうした間違いは自分の力で直していく必要があるのですが、前に述べた理由で、これを一人で行うのは難しいです。

カルトに深入りした人を社会復帰させる方法は、大きく2つあります。以下に述べる”ディプログラミング”と呼ばれる方法と、そこから発展した”インフォーミング”と呼ばれる方法です。

4.1 ”ディプログラミング”の手法は危険

ディプログラミング、あるいは解体といわれている手法は、カルトの信者を強制的に一般社会に連れ戻し、”君はマインドコントロールされていた””あの教祖の教えはうそだ”といったことを、マインドコントロールと同じ手法を用いて、信者の頭に”書き込みなおす”方法です。

この方法は、かつては主流の方法でしたが、多くの問題があります。

ディプログラマーは本人に対して、”お前は洗脳され、マインドコントロールされている”と教えます。もしこれを本人が受け入れれば、信者は自分の人生において、他人が下した重大な決定を受け入れざるを得ない立場に2度も追い込まれることとなります。

最初は教団によって信者になることを決定され、次はディプログラマーによって、その教団を離脱することを決定されるのです。

このことは、本人の自己否定につながります。結果、ディプログラミングを受けた人が抑うつ的になったり、ディプログラマーに対して敵意を抱いてしまったり、といった問題を生じ、現在ではあまり行われなくなりました。

4.2 勉強することでマインドコントロールを解く

ディプログラミングの技法は改良された もう一つの方法が、”情報の提供”とか、インフォーミングなどと呼ばれている方法です。

”マインドコントロールされたあなたは、間違っていた”という教えかたは、本人の自己の全てをを否定してしまい、相手に与えるショックが大きく、うまくいきません。

現在は、”そうした考え方があってもいいと思うけれど、それにこだわらなくてもいいのではないか” ”世の中にはいろいろな考え方があっていい”ということをもまず教え、その後一般社会と、カルトのどちらがいいかは、信者に選択させるという方法がとられます。

二元論的な思考の否定がカギ マインドコントロールの手法の特徴のひとつが、光と闇、善と悪、神とサタンと行った二元論的な教育を行い、中間の立場を認めないことです。こうした教育法を行うことで、組織の教義はより印象深く頭に入り、また集団の結束は深まります。

カルトから離れてきた元信者を説得する際、彼らが受けてきたマインドコントロールのすべてを否定するのではなく、”世の中にはいろいろな立場があってもいい”という部分のみ説得し、後は自由選択に任せる、という立場をとると、元信者は自分で情報を集めるようになり、マインドコントロールは自然に解けるといいます。

研修医をディプログラミングするのは危険 病院を移ってきた研修医も同じことです。

臨床医の教育の充実をうたっている病院で、何年か研修を受けてきた研修医が、新しい職場に移ったとき、そこで自分の方法論が受け入れられないと、彼らは以下のような行動をとります。

- 自分の受けてきた研修は全て無駄だったと思い込み、抑うつ的な態度をとる
- 逆に、新しい職場に対して攻撃的な態度をとり、そこにいられなくなる

いずれにしても、不幸な転帰です。

情報を否定するのではなく共有する こうした研修医を受け入れる職場の上司が、研修医の受けてきた教育内容を頭からは否定せず、”世の中にはいろいろな立場がああってもいい”ということを刷り込むのに成功すれば、マインドコントロールは自然に解けます。医師の世界には、MEDLINEをはじめとする情報媒体がたくさんあります。

公平な立場で勉強を重ねられれば、自分の受けてきた教育の正しい部分、間違っていた部分は自然に見えてきます。卒後研修の経験も、無駄にはなりません。上手くいけば、自分の脳内の”間違っただけ”が事故を起こす前に、修正できるかもしれません。

5 それでもマインドコントロールは必要

マインドコントロールの悪い部分ばかり書いてきましたが、それでも卒後研修には、マインドコントロールの手法は必要だと思います。

研修医が学ばなくてはいけない、医学的な知識は増える一方です。その反面、学習に割ける時間は減ってきています。患者の権利が今ほど強調されていなかった頃は、慣れていない頃から実際の患者さんを診察することで、研修医はやってはいけないことを勉強することが出来ました。今同じ事をしたら、確実に犯罪者です。

買ったばかりのコンピューターはただの箱 卒業したばかりの研修医というのは、ちょうど何も入っていないパソコンのようなものです。昔のパソコンは、電源を入れても黒い画面しか出ず、ここに自分でプログラムを組みました。現在市販されているパソコンは、Window や、MacOS といった基本ソフトが最初から入っています。これはプログラミングを知らなくても簡単に使え、ワープロやインターネットといったことはすぐに出来るようになります。

マインドコントロール的な手法を用いた臨床研修は、ちょうど基本ソフトのインストール作業のようなものです。

もう OS 無しのパソコンは使えない Windows が裏でどんな仕組みで動いているのか、理解している人はほとんどいませんが、誰でも Word や Exel を使うことは出来ます。

こうした OS はよくクラッシュし、そのたびに仕事はめちゃくちゃになります。それでも、1 からプログラムの勉強をしようとする人は非常に少数です。不安定であっても、今の Windows や MacOS の機能は大体満足の行くものですし、いまさらプログラムの勉強をしないおすには、時間がかかりすぎます。

どうせ脳をいじられるなら質の良い知識を どうせインストールするなら、バグの少ない、安定した動作をする OS を入れておきたいものです。臨床研修を行う病院を探す際、自分の頭にインストールされるのはこういった知識なのか、就職前にぜひとも検討してみるべきだと思います。